

【特集】新しい日常、そして今後:コロナ禍を経験して —現代行動科学会第37回大会テーマセッションから— コロナと報道/マスコミの立場から

草薙 伶央 (株式会社クリーク・アンド・リバー社)

1. 仕事への影響

テレビのニュース番組制作という仕事柄、収入が減るなどの影響はありませんでしたが、仕事の仕方は大きく変わりました。まず番組のために何より大切な「取材」「撮影」が制限されました。特別な場合を除き関東圏の外に行くことができなくなり、局内からのリモート取材などが主になりました。

そしてコロナ禍にあたり、これほど「報道の難しさ」を感じたことはありません。これまではどんなニュースでも、一定数の「自分に関係ない」という視聴者がいたように思えます(災害報道なら、被災地から遠く離れた地域に住む人など)。

これまではそういった人にも「どうやって自分のこととして捉えてもらうか」がメディアとしての命題でしたが、新型コロナに関する報道は性別、世代問わず「どの人にも関係がある」という点でこれまでの報道と全く異なります。

これまで以上に放送に対する大きな責任を感じ、神経質すぎるほど神経質にならなければなりません。それが仕事に関してコロナ禍で感じた一番の影響です。

2. 生活への影響

去年5月に長男が産まれたばかりで、成長していく過程を自分の両親や妻の両親に孫の成長を直接見せられないことが何より残念でなりません。

ただこうした中でも、お盆の頃に「オンライン帰省」などといった言葉も取り沙汰されましたが、ネットが発達した時代であることがまだ救いになっていると思います。実際私もビデオ通話で時々お互いの顔を見ることで、家族とのつながりを忘れずにいられます。

また、仕事への影響とも被るのですがこれまでなら考えられなかった在宅勤務が週1回程度ですが導入され、家族と過ごせる時間が増えたのはむしろ良かった点と言えます。

3. 新しい日常、そして今後

この半年あまり、友人や知人に何度「コロナが落ち着いたら飲みに行こう」と言っただけ分かりません。飲み会が大好きなタイプでもなかった私がそこで感じたのは、人間いくら「外出控えて」「飲み会控えて」と言われても、長い時間は我慢できない生き物なのだなということです。

言葉にしにくいですが、直接他者と会って取るコミュニケーションは食事や睡眠と同じように「生きる活力」として必要なものなのではないかと強く実感しました。

話は戻りますが、長男はコロナのこの字も知らずすくすくと育っています。どうかこの子が物心つく前にコロナが収束し、「2020年は大変だったんだよ」と昔話として聞かせるような生活に戻っていることを願います。

そのためにも今はまだ「新しい日常」を粛々と続けなければならないと思います。